

「経済学の基礎問題」の出題意図とポイント

出題の意図：

基本的なミクロとマクロ経済理論の理解度と実際の市場や経済政策の知識を確認することが試験の目的である。各設問における問題の意図とポイントは次の通りである。

問1 出題意図：完全競争下で財を交換するさいの古典的な経済理論の理解度を試す問である。機会費用や均衡点での条件（価格＝限界費用）など経済用語の確認とそれらの概念の応用問題により受験生の理解度を試す。

- 1 絶対優位：X財とY財の労働投入量を比較すると、それぞれ $5 < 10$ と $20 < 50$ のため、A国が両財に絶対優位を有する
- 2 比較優位：A国とB国の限界変形率はそれぞれ $(100/5)/(100/20)=4$ 、 $(100/10)/(100/50)=5$ となる。 $4 < 5$ によりB国がXにA国がYに比較優位を有する
- 3 価格＝限界収入＝限界費用の関係から、A国： $P_X=5w$, $P_Y=20w$ 、B国： $P_X^*=10w^*$, $P_Y^*=50w^*$ と表すことができる
- 4 各国における相対価格は、A国： $(P_Y/P_X)=1/4$, B国： $(P_Y^*/P_X^*)=1/2$ である。そのため交易条件（T）が $1/4 < T < 1/2$ のとき国際貿易が行われる

問2 出題意図：完全競争市場における均衡価格と生産量を求め、価格変動による均衡点の変化を求める応用問題を用いることにより競争市場における一般的な経済学の知識を試す。

- 1 均衡条件である $D=S$ と式(1)(2)により $100=5/4P$ 。これにより均衡価格は80、生産量は20
- 2 需要の価格弾力性 $(e) = -(\Delta D/D)/(\Delta P/P) = -(\Delta D/\Delta P) P/D = 4$
- 3 総費用関数 $(TC) = Pe(Oil) = Pe(S^2/4)$ と表せる。限界費用関数 $(MC) = 1/2PeS$ 。（供給曲線 $P=4S$ から $Pe=8$ を求めることができる。ただし、この部分は次4で求めてもよい）
- 4 10円上昇した結果 TC と MC は $TC=(Pe+10)Oil=(Pe+10)S^2/4$; $MC=1/2(Pe+10)S$ と表すことができる。そして $Pe=8$ から $MC=9S$ を求める。需要曲線は変化しないので $D=100-P$ により、ここでの価格は90となり、10円上昇したことが分かる。

問3 出題意図：実際の市場や産業は完全競争に直面しておらず、ある企業に独占されていることがある。そのため、完全競争でない市場における均衡価格と生産量を求める問いを提示している。

- 1 逆需要曲線： $P=100-5D$ 、限界収入（MR）曲線 $=100-10D$
- 2 $MR=MC$ により $100-10D=10+20D$ 均衡需要 $=3$ ，均衡価格 $=85$
- 3 ラーナーの独占度： $(\text{独占均衡価格} - \text{独占企業の } MC) / \text{独占均衡価格}$ 。独占企業の

$$MC=10+60=70 \text{ のため独占度は } (85-70) / 85$$

問4 マクロ経済政策を考えるさいによく用いられる ISLM の経済学の基礎理論を問い、この理論をもとに日本が直面したゼロ金利状態での有効な経済政策の知識を確認している。経済理論だけではなく学生の経済への興味を試す問である。

- 1 「生産＝支出＝所得」を説明すること
- 2 限界消費性向は c 、平均消費性向は $(C_0+c(Y-T))/Y$
- 3 LM: 式(6)より $er=-P/M+a+dY$; $r=(d/e)Y+(1/e)(a-P/M)$
IS: 式(3)(4)(5)より $Y=C_0+cY-CT+I_0-er+G$; $r=((c-1)/e)Y+(1/e)(C_0-cT+I_0+G)$
- 4 流動性の罫： $e \rightarrow \infty$ の状態を指す
- 5 例えば、 Y を増加させるために財政緩和政策の導入が考えられる